

霊長類研究をベースとした人間関係論究についての考察

上原 貴夫

1. 人間関係研究の再認識を促すもの

現在、人間関係についての研究においてその基礎についての認識が特に注目を浴びてきている。その基礎とは「人間関係の成立」あるいは「起源」についてのものである。なかでも、この視点からの研究において霊長類研究に基づいた研究が大きく進展している。その際、野生の霊長類についての研究の必要性が強調されている。

人間関係の起源についての研究が注目されるには理由がある。まず、これにはめまぐるしく変わる現代において、また多様な時代といわれる現代において人間関係のみならず人間そのものについてその本来あるあり方がみえなくなってきたことへの反省がある。このことは広く人と人との関係について改めて考えさせる。そのなかで、家族や人間関係の視点からいえば、それらの本来のあり方についての認識が求められてきている。人間関係についてその基礎が問題にされる理由の1つとして、人間についての再認識に迫られているという現代に特有な社会状況があると考えられる。

さらに、これまでの人間に関わる研究の進展によるものがある。人間関係についての研究は現在もかなり広範に行われてきている。そのなかで研究上の進展として、人間社会あるいはその社会で人と人を具体的に結びつける人間関係についてその原形をたどる概念的な基礎づけが見出されてきているという点がある。すなわち、研究上の手がかりを与える新たな概念が急速にクローズアップされてきている。これと歩を一つにするものとして霊長類研究の進展がある。

それは人類学的な研究の発展を踏まえたものである。近年、人間の進化に関する重要な発見が相次いでいる。それは人類化石を中心としたものである。これらの人類化石に関する考古学的な発見による実証性を得ながら、人間が人類としての特性を備えてきた過程について論究されてきている。同時にこの方面からの研究上の軌跡を生活史の上でたどるアプローチの1つとして霊長類研究がある。両者をつなぐ有力な概念的枠組みの1つとして“hominisation”についての研究がある。霊長類研究を基礎として人間関係を捉える根拠の1つはここにある。

hominisation は人が人になる（ヒト化の）過程をあらわす。あるいは人としての生活を形成する過程をあらわすものである。現在霊長類に関する研究の主要なテーマの1つがここにあるといえる。このなかで例えば「文化の形成」や「家族の起源」、「人間関係の起源」の問題が論じられる。もちろん人間関係に直結した社会やその形成、構造、機能も重要なテーマとなる。

さらにこれは、霊長類についてのもう1つの研究上の成果と結びついている。それは分類学

によるものである。近年、人間と霊長類に関する分類が大きく変容された。これについては後に詳述するが要するに人間と霊長類、特に今まで「類人猿」とされてきた種が系統的に同系とされたのである。象徴的な言い方をすればこれまで類人猿とされ、人間とは別に考えられてきたゴリラ、オランウータン、チンパンジーが人間と同じカテゴリーで捉えられるようになったのである。

このような視点のもとに人間社会の起源や人間関係の起源そのもの、またこれらの原形を探る研究が霊長類研究をベースとして可能となる。

2. 人間関係論研究の動向

人間関係についての研究分野は非常に幅広い、この幅広い分野のなかで研究の方向を大別するならば対照的な2つの方向のもとで進められている。1つの方向は人間関係のメカニズムに関するものである。他の1つは人間関係の基礎に関するものである。前者は人間関係の構造や機能、関係に関わる心理的、行動的な機制などを中心に進められている。方法論的には実験や調査を中心におこなわれている。また現在、かなりの成果をあげてきている。

後者は人間関係の起源や成立に関するものである。これらに関する研究では、まさに問題は素朴ともいえるほどに基礎的な部分についてのアプローチがおこなわれている。その問題意識やあるいはテーマは、例えば「なぜ人は人と暮らすのか」、「なぜ人間は社会をつくるのか」、「家族はどうやってできあがるのか（成立するのか）」といったことである。

これらの問題意識は実は表現の素朴さからうける印象以上に重要な意味を持っている。なぜなら、それらはいずれも人間としての独自の特性や本質に直接にかかわるからである。しかもその説明は未だ十分ではない。人間は人との関係をつくり、社会をいとなみ、また家族を形づくるという生活をおこないながら、ではなぜそのようなあり方をしてきたのか、という点については満足のいく解答を得ていない。人を取り巻く現代社会の現実は否応なくこれらに対する認識を呼び起こす状況にありながら、未だ十分でないのが実状である。

主な人間関係論究

生理的・心理的側面	社会的側面	価値的側面
personality	集団	哲学
適応	家庭・家族	倫理・道徳
カウンセリング	地域	宗教
態度変容	group dynamics	など
など	leadershi など	・
・	・	・
・	・	・

これらの問題への論究は実験的に、また各種の調査に基づいておこなわれている。同時にもう1つの特徴的な方法として霊長類をベースにした研究がおこなわれている。しかも、多くの成果をあげてきている。

霊長類に関する研究には大別すると2つのタイプがある。1つは霊長類そのものに関する研

究である。ここでは霊長類の特性としてその種としての形態や生態、あるいは具体的に分布や食性、繁殖等々の問題がテーマとされる。もう1つのものは霊長類を通して実は人間を研究するというものである。そこでは霊長類は人間に近いものとして、あるいは、なかでもゴリラやチンパンジー、オランウータンなどでは同じ仲間として、彼らの特性を通して人における問題が捉えられる。彼らの生活のなかに人間におけるそれらの起源や原形を探るのである。

しかし、ここで注意しなければならないのはそれらは単に比較の対象としてこれら霊長類を捉えるのではないという点である。そこでは人間が人間としての特性を獲得し、形成する過程をあとづけ、同時にそれを探るなかに人間としての特性が持つ本来の意味と人としてのそれらのあり方を探るというものである。すなわち、人間が人間としての特性を形成する過程とともにそこに含まれる人としての本質を探求するものである。

また、さらに説明を加えるならば霊長類に関するこれら両者の研究（「霊長類そのものを研究する」方法と「霊長類を通して人間を研究する」方法）は非常に密接に結びつくものである。なぜなら、研究の出発点として当然のことながら、分布や地域特性などを踏まえた霊長類の生態についての認識なくしては、人間についての研究においてその出発点にすら立てないからである。

また、霊長類をベースとした研究を促す動向として人間の諸現象についての行動学（ethology）的アプローチの台頭がある。エソロジーは行動を通して人間的特性や諸現象についてアプローチするものである。その場合、それらの行動の起源や形成の過程、行動が持つ意味を問題とするところに特徴がある。このような視点は人間関係論究においても重要な視点をもたらす。たとえば、人間関係についてその発生（起源）やその意味、また、人類の長い歴史のなかでどのようにして人間関係を自己の生活のなかへ取り込んできたのか、またそれをどのように進化させてきたのか等の問題へアプローチする道を開く。

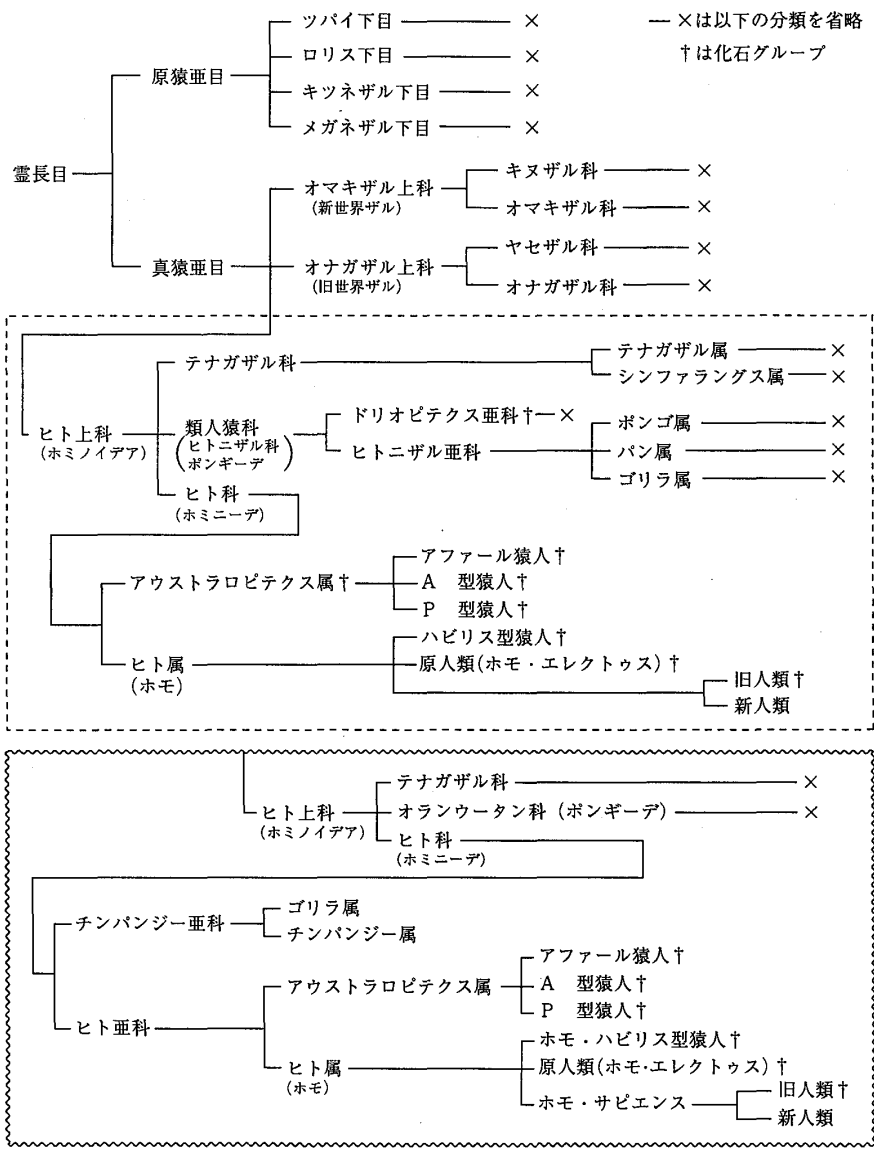
現在、エソロジーにおいて論究される分野は多様である。それは、人間の社会行動や社会の起源そのものなどについて論究される。また、ハーロー（Harlow）が子ザルを用いて「愛情」の起源について研究したように、行動の発生にまでさかのぼりながら人間の心理面にまでおよぶ。また、例えば人間的特性としての「母性」や「父性」など人間にとって本来的であると考えられてきた問題についても、人類の歴史のなかで形成されてきた意味やその過程などにさかのぼって研究の対象とする。母子関係など人間関係に直接関係した問題も同様である。

現在、霊長類を対象とした研究のなかで、このような視点に立つものを示すならば、山極寿一氏が示しているような「人間の家族の起源」を父系が連なるゴリラの家族形態に求める研究や、河合雅雄氏が示しているように社会の原形をゲラダヒヒが家族以外の群れ集団との交渉関係を形成して、一種の community を形づくるところに求める研究など様々な研究がある。

3. なぜ霊長類を通した研究が有効か

ところで、ではなぜ人間についての研究において霊長類を研究するのかということである。これには大きく3つの理由がある。1つは分類学の視点からである。他の1つは人間の進化に

図 霊長類および人類分類表 (江原 1990)



霊長類および人類分類表 (--- 内は現在ふつうに使用されているヒト上科の分類。)
 (~~~~ 内は今後予想されるヒト上科の分類。)

関するものである。これに加えて、もちろん霊長類の生態的な特徴がある。

第一は自然界における人間の分類学上の位置づけと、それと関連した人と霊長類との関係に関わるものである。また、これは結果的に人を研究する際に霊長類研究を踏まえることについての研究の有効性を示すものである。これには最近の研究の成果が大きく役立っている。現在でも霊長類に関する分類上の研究は着々と進められている。それは化石を中心とした形態的なものだけでなく、DNAなど遺伝子を用いた最新の研究など様々な視点や方法によっている。その成果として、

霊長類に関する分類が今なお変更されるということが生ずる。

この最近の成果を図でしめした。図は最近の研究の成果で新たに変更されてきている点を示したものである。これによると人間はサルの中の1種のなかに位置づけられる。これは霊長類を通して人間を研究する視点を大きく補強するものとなった。なぜなら、仮にいかに研究上効果的な対象であったとしても、分類の上でも縁を辿ることすらまったく遠いといったような時には多くの場合、その解釈の上で無理が生ずることになる。この点、分類の上でも極めて近く、むしろ同類ともいえるほど近縁であるということは研究にはずみをつけるものである。

次に人間の進化に関する点である。これは霊長類の種類にも関係するものである。霊長類を人間研究の方法とするねらいとしては人間自身の行動や生活の成り立ち、起源をそれらの原形に遡って研究するところにある。人間自身のそれらについての研究は歴史や考古学でも行わ

れ、もちろんそれぞれに重要な成果をあげている。それにもかかわらず、これらでは代わり得ない貢献として霊長類研究が重要な役割を果たしている。それは、たとえば、化石や遺跡としてはどうしても残り得ない「行動」や「生活」の成り立ちをこれら霊長類をベースとした研究が伝えるという点である。これについては現在地球上に生存する霊長類がいわば進化を辿ることができるほどに各レベルの霊長類が生息しているということが役立っている。つまり、原始的な原猿類からそれよりはるかに人に近い種、また人と同じと考えられる種など、多くの種にわたって幅広く生息し、進化を辿る上でまことに有効な状況が保たれている（分類表参照）。

この生態的な特徴のなかで大きな点はその行動についての人間との比較のうえで指摘できる。端的にはそれは人間との「類似性」からもたらされるものである。

人間だけにみられる特有なものとして従来からいくつかの特徴が挙げられてきた。それは必然的に人間以外の動物（霊長類も含む）ではみることができないものと考えられてきたものである。それらは1) 直立二足歩行、2) 道具の使用、3) 言語の使用、4) 遺伝子的な相違などである。

人間的な特徴をあらわすもので、しかも霊長類を含めた他の動物ではみられない特徴として以上の主な点が指摘できる。

しかしながら、現在ではこれらの特徴についてはことごとく霊長類のなかでもみられるものであることがわかってきた。「直立二足歩行」はチンパンジー、なかでもボノボはかなり長い距離を立ったままで歩くことができる。しかも、両手にそれぞれなにかを持ちながら歩くということもする。

道具の使用と人間との関係については「人間は道具を使う動物である」といわれる。しかも、道具を加工したり、あるいは1つの道具をさらに使いやすくするための道具「道具のための道具」（メタ道具）を使うのが人間であると言われる。

野生霊長類の道具使用の報告はグドールによる「シロアリ釣り」が最初である。これはアリ塚の穴に棒を差し込み、それを引き抜いた時にこの棒についてくるアリを食べるものである。同じような行動に「蜜吸い」というものがある。アリ釣りや蜜吸いの行動ではいわば道具の加工といえることまで行っていることが発見されている。たとえば、蜜吸いでは差し込んだ棒がより多くの蜜をふくむことができるように先端を噛んでハケ状にしている。

このような道具の使用については杉山幸丸氏らが通常「ヤシの実割り」といわれる行動で野生のチンパンジーが石を道具（ハンマー）として使うことを調査している。この場合、果実の下石が水平でなくて実が安定しない場合はそれを支えるために地面との間に石を差し挟むことをする。ここで挟み込まれた石は道具のための道具として使われたものであり、その意味で「メタ道具」の役割をしているものである。

言語は霊長類では人に近づく種であるほど言語といわれるコミュニケーション手段を用いていることが知られている。ニホンザルもいくつかの言語行動を行う。また、コミュニケーションの手段としてはこのような言語を中心とした verbal communication だけでなく non-verbal communication といわれる言語を用いないものも当然使われている。

テンパンジー生息地の環境と各地の特異的道具使用文化 (杉山 1990)

調査地 (国)	生息環境	(Macrotermes)の生息種*	各種堅果の有無**	シロアリ釣り紐***	掘り棒	ハンマー使用と対象堅果	文献
アシリク (セネガル)	サバンナ 疎林	+	(Eg)	+	-	(-)	McGrew et al., 1979
ティワイ (シエラレオネ)	多雨林	(+)	Ds (Ce,Po, Pe,Sg)	-	-	+Ds	Whitesides, 1985
サボ (リベリア)	多雨林	(+)	Ce,Po,Pe, (Ds,Sg)	-	-	+Ce,Po, Pe	Anderson et al., 1983
ニンバ? (リベリア)	?	?	Eg	?	?	+Eg	Beatty. 1951
モンロビア★ (リベリア)	森林	?	Eg	-	-	+Eg	Hannah & Mc- Grew. 1987
ボソウ (ギニア)	二次林	bellicosus	Eg(Pe)	-(細棒使用)	-(棒使用)	+Eg.(Pe)	Sugiyama & Ko- man, 1979 ; Sugiyama. 1981; 杉山. 1978
タイ (象牙海岸)	多雨林	+	Ce,Po,Pe,Ds, Sg, (Eg)	-	-	+Ce,Po, Pe,Ds,Sg	Boesch & Boesch 1981, 1983, 1984
カンボ (カメルーン)	多雨林	muelleri	Ce,Sg (Po,Pe)	-	+(掘り棒 に房つき)	-	Sugiyama, 1985, 1986
オコロビコ他 (赤道ギニア)	多雨林	muelleri	(Ce,Po,Pe, Ds,Sg)	-	+	-	Jones & Saba- terpi, 1969 ; Sa- baterpi. 1974
マココウ★ (ガボン)	多雨林	muelleri	(Ce,Po,Pe, Ds,Sg)	-(アリ採 り)	-(オオキ ノシロア リ食なし)	-	Hladik, 1973
ベリンガ (ガボン)	多雨林	nobilis	(Ce,Po,Pe, Ds,Sg)	+	-	-	McGrew & Ro- gers, 1983
ブドンゴ (ウガンダ)	森林	?	?	-	-	-	Sugiyama, 1969; Reynolds, 1965 ; 他
ゴンベ・マハレ (タンザニア)	サバンナ 疎林	bellicosus herus	Eg	+	-(アリの 巣かき回 し)	-(堅果の 叩き付け)	Goodall, 1986 ; 西田1980 ; 他

(注) * . +は種不明だがMacrotermes属の生息あり。()は推定。Macrotermes はオオキノシロアリ。

** . 少なくとも1か所でハンマー使用の対象となっている堅果。Eg=Elaeis guinensis (アブラヤシ), Ds=Detarium senegalense (デタリウム・セネガレンス), Ce=Coula edulis (コーラ・エデュリス), Po=Panda oleosa (パンダ・オレオサ), Pe=Parinari excelsa (パリナリ・エクセルサ)。

Sg=Sacoglottis gabonensis (サコグロティス・ガボネンシス) ()は微量存在または推定。

*** . +はあり, -はなし。()は類似の行動あり。 ★国内捕獲の導入集団。

ところで言語については長い期間, 人間と同じ音声を持った言語の習得(学習)についての研究がおこなわれてきた。しかし, 失敗の連続であった。現在では, 「人工言語」(レキシグラム)や「手話」を用いて人間とコミュニケーションを行う実験が実施され, 大きな成果をあげ

ている。スー・サベージ・ランボー (Sue Savage Rumbaugh) は「カンジ」という名のボノボを対象にして手話を用いた人間との会話について研究している。それによるとカンジは約1000語の英語の単語を覚え、人間との対話にほとんど不自由していないという。

遺伝子的な相違については、実はこれこそが人間と人間以外の他の霊長類との違いを決定づけると考えられてきた。しかし、現実には98%ほどが同じで、わずかに1~2%だけの相違であった。要は結果的にはほとんど同じとなった。しかし、現在、この1~2%の違いをどのように解釈するか議論が行われている。

このように、これまで人間に特有な行動であり、それらこそが人間とサル(人間以外の動物)との違いを決定づけると考えられてきたものが、実は霊長類でもすでに行われているということが解ってきたのである。現在ではこれらの特徴は人間にだけ特有な行動ではないと考えられてきている。逆に言えば、むしろこれらは人とサル(霊長類)との類似性をあらわすものと考えられるのである。

これらの類似性は、人間を研究する際に霊長類を活用することの有効性と重要性をしめすものである。

霊長類の生態的な特徴としては彼らが群れをつくり、社会を維持しながら生活しているという点である。霊長類の特徴として、彼らは一定の社会構造をもちながら生活している。そこでは個体間にみられる相互の関係とともに、血縁や性別などの属性によってつくられる小集団も存在する。これらの小集団はお互いに影響しあって生活している。

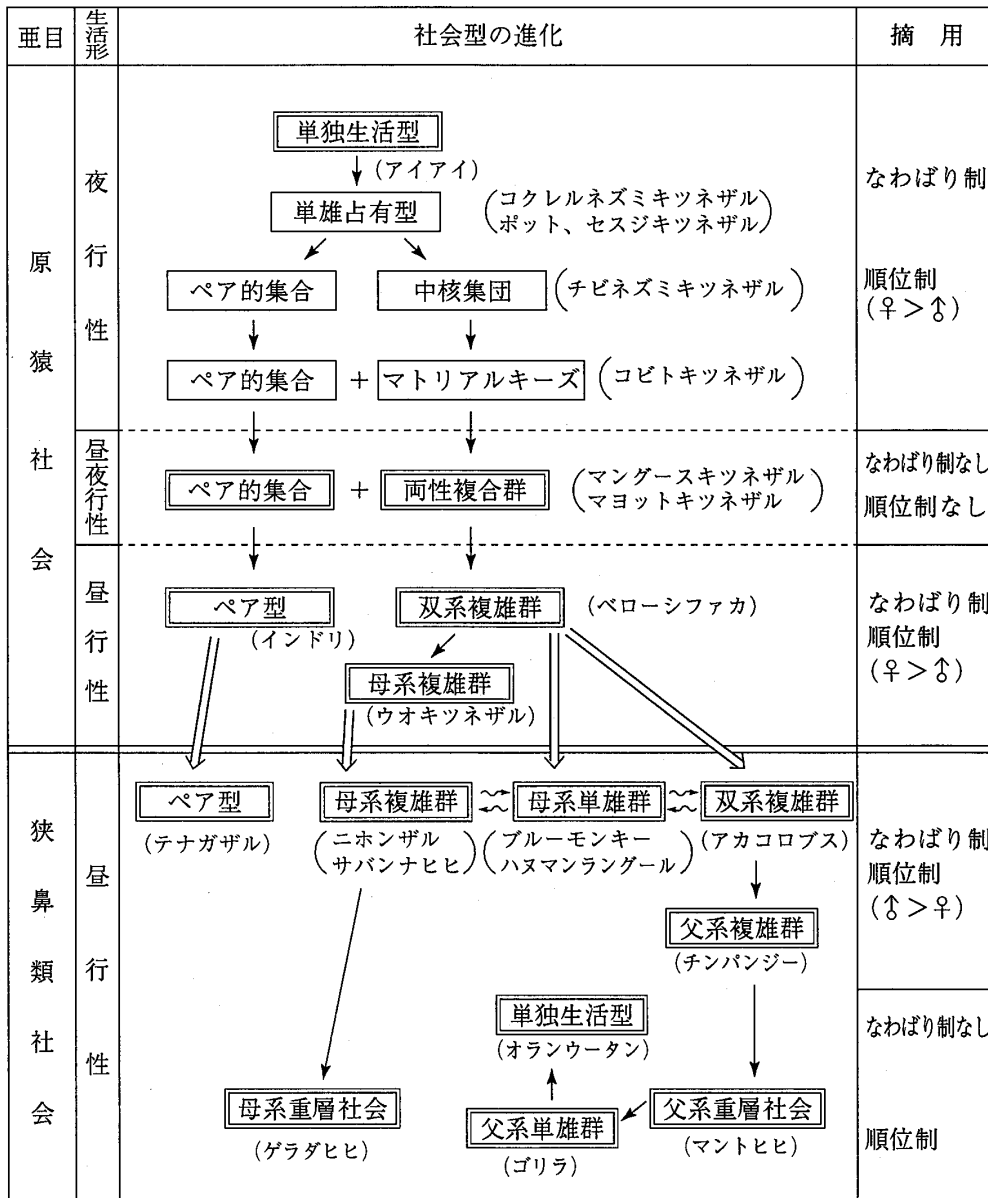
人間も同様である。人間関係についていえば、霊長類に注目する意味はまさにこの点に中心の1つがある。霊長類による社会はその種によって血縁の個体だけで集まるといった単純な社会から、いくつかの小集団相互がそれぞれに独立しながらも相互交渉もしているといった複雑な社会、またきわめて人間に近い社会を持つものまで分布している。そのため、人間が社会を形成し、現在につながる特徴を形づくるまでになった過程、およびその過程のもとで取り込んできた人間的特徴を辿るうえで得難い対象であるといえる。

霊長類の社会も種によって異なる。とりわけ構造的に異なる。河合雅雄氏は、典型的なものだけしめしている(次ページの図参照)。

ところで社会が持つ意味は単に各個体の集合という意味以上のものである。社会はそれを形成する種が備える「文化」と密接なつながりを持つと考えられる。文化についての定義は様々な視点から示されているが、ここでの文化とはそれぞれの種において形づくられた「生活様式」をさすものである。しかし、もちろん種に見られるすべての生活様式をさすものではない。そのなかで、生まれながらに備えているものではなく「後天性」であること、個体から個体、あるいは群れ間において「伝播性のあるものであること」、おこなわれる範囲が「特定の範囲であること」などの文化としての特性を備えたものをさすものである。

社会はこれらの文化を発生させ、また伝承する機能を持つものである。霊長類から人への進化を考える際、この文化の概念は特に重要である。現在、これまで人と霊長類を分けると考えられてきた特性(前述)は両者にとってかなり重なり合うということがわかってきた。しか

図 霊長類の社会構造の進化 (河合 1992)



社会型
 ある社会型から他の社会型への移行型
 社会型の移行
 原猿から狭鼻類への社会型の移行
 一つの種が社会的相転位により、両社会型をとりうることを示す。
 () の中は、社会型をつくる主な種。

し、重なり合いながらも両者の特性を見るとあきらかに異なる点はやはり存在するし、また多い。では、なぜ両者(人と霊長類)の間に現在見られるような相違が存在するのか、という疑問が湧く。この疑問に答えるものとして両者がそれぞれに生きてきた文化の相違がクローズアップされてくる(後述)。すなわち、両者の相違はまさにこの文化にあると考えられるのである。つまり、文化の伝承と創造のなかに両者のそれぞれの独自の特性が形成されてきたと考えられる。

人間も、また人間に近い霊長類も共に社会を形成し、文化を持って生きている。この意味からも霊長類研究が注目される。

社会や集団についていうならば、それらには実に様々なタイプがある。それらに一律に当てはまる概念は難しい。しかし、単に多くの個体が集まっているというだけではこのように社会や集団とはいわない。そこに集まった個体やあるいはサブグループの間になんらかのつながりが維持され、しかもそれが一定のルールのうえで個々の個体の行動になんらかの影響を及ぼすことがある場合にこのようにいう。

たとえば、コサギである。これは特に繁殖の時にはコロニーといわれる集団で営巣地をつくる。この時、場合によっては数千羽の大集団になることがある。長野県では最大のコロニーが上田市の千曲川中州に1987年頃までに形成されたことがある（現在は消滅）（上原貴夫 1988）。しかし、これを社会という言い方ではあらわさない。それは多くの個体が集合したものであっても相互の交渉や関係ができていたと言いがたいからである。また、この集団において新たな文化としての生活様式が形成される形跡は今のところ発見されていない。たとえば営巣として巣を作るにしてもその方法は他の個体から伝えられたものではなく「習性」としておこなっているものである。

4. なぜ野生ザルか…野性ザル研究の意義

霊長類研究の上で現在、野生霊長類についての研究の必要性が強調されている。

「なぜ野生ザルを研究するのか」ということは、1つは従来の研究に対する反省であるとともに、他の1つは逆説的ではあるがこれまでの研究の成果でもある。

現在、日本における霊長類研究は世界でもおそらくトップクラスにあるといわれる。それは「個体識別」という方法を最初にとりいれ、それが多くの先駆的な業績を生むとともに、今なおそれを続けていることによる。他の1つは餌付けによるものである。これにより観察は極めて容易になった。わかりやすいことであるが、研究をしようにも相手がみえなければ行うことができない。餌付けは観察を容易にした。これにより多くの成果が生まれた。

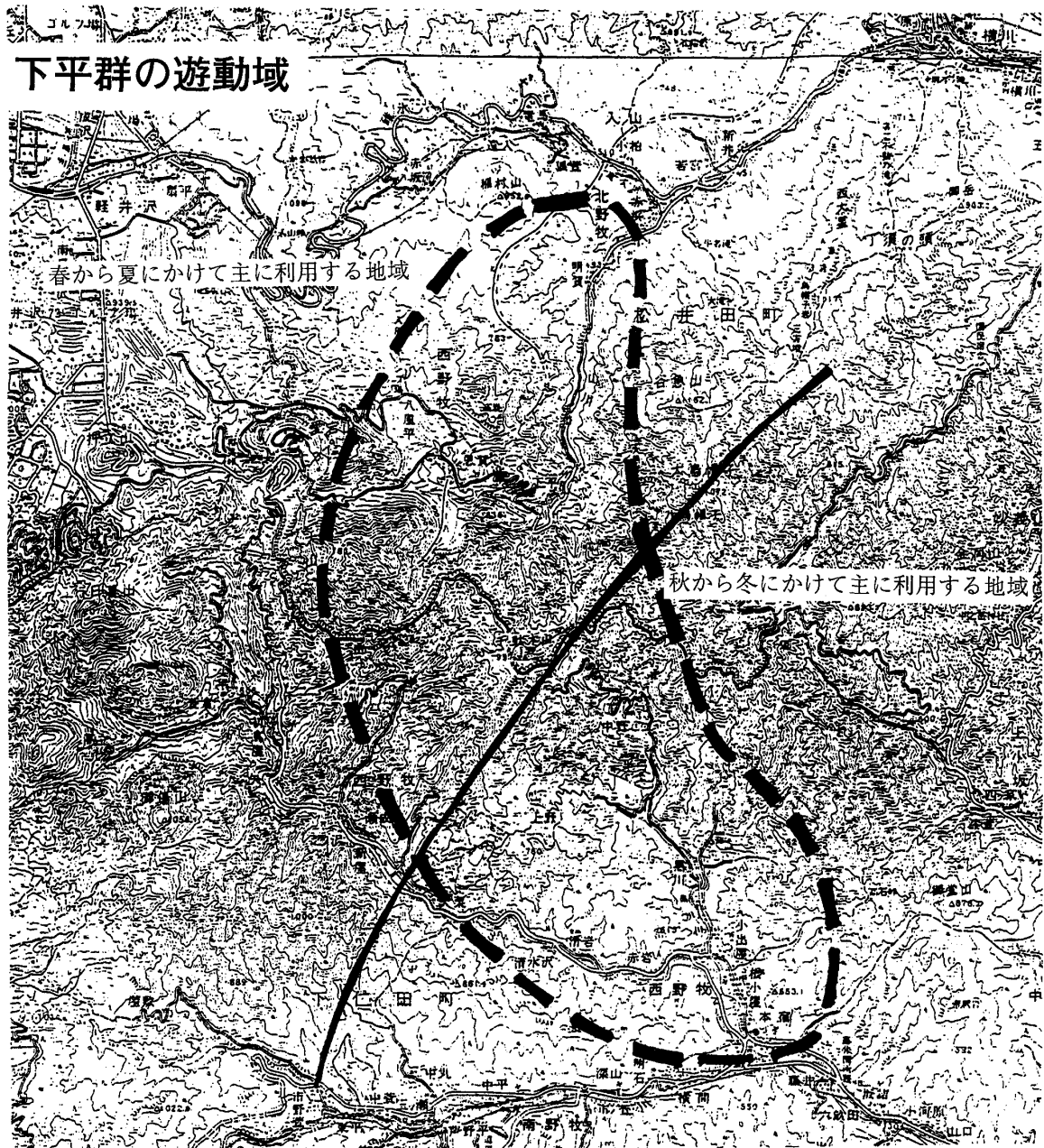
しかし、このことは新たな問題を生んだ。それは餌付けされた、あるいは飼育されたサルが彼らの実際上の生態を我々にみせているだろうかという素朴な問題である。あるいはより厳しく受けとめるならば、餌付けや飼育下でのサルが本当のサルであるのだろうかということになる。

実際に霊長類に関する研究のなかで、これまでの定説とは異なった点を指摘する研究も見られてきた。たとえば、「二重同心円構造」への疑問である。これまで特にニホンザルの群れは1匹のボスを中心とした二重同心円構造を持つといわれてきた。中心部はこのボス（通常はオトナオス）を中心に数頭のオトナのメスと子どもたちでできあがる。これを取り囲むように若ザルが周辺部にいると考えられてきた。しかし、ニホンザルでいうならば、野生のニホンザルをみた場合、必ずしもこの通りではない。ボスといわれる個体の存在をみつけることが困難な場合が多い。山のなかであるために発見しにくいことを考慮に入れたとしてもこのような構造を見いだすことがむずかしい。

また、サルの社会は厳格な序列のもとに成り立っているといわれる。この序列の頂点に立つ

図 野生ニホンザルの環境利用 (上原 1994)

この群れは春から夏, 秋から冬の期間で主な遊動域を変えている。



のがボスである。従って、ボスザルは常に群れの先頭に立って群れ全体を率いていく行動をとると解釈されている。しかし、これを野生ザルについてみた場合、今述べたようにボス自体の発見が非常に難しい。同時に、一つの個体が常に群れ全体を率いているということもなかなか確かめられない。

野生のニホンザルの群れについてみた場合、このような状況が見られる。ではどのような状況のもとでも常にこれと同じようにボスやそれらにともなう序列的なものが見えにくいということもそうということでもない。たとえば、これを動物園などの飼育下での群れを見た場合にはやはりボスとおぼしき有力な個体がいる。また、この個体に対してほとんどの個体が従う状況が見られる。従って、これまでいわれてきているような序列的行動が見られるといえる。

これら両者を見た場合、ではどちらが本来の行動であるかということが問題となる。しかし、事実はこの例のニホンザルにみられる両者の行動特性はそれぞれに環境に応じた行動様式として認められるものであると考えられる。この認識を踏まえながらも、自然のままの状態としてその種に固有な行動が把握されなければならない。その意味で野生に生きる状態での生態を通してその群れや個体間の関係を知る必要がある。

現在、このような研究上の状況を踏まえて「野生」に生きる霊長類の研究が強く求められている。

また、霊長類はニホンザルであっても生活や行動のうえでの適応の幅が非常に広い。環境に応じた行動を築いている。このことは、ニホンザルが備えている行動特性のなかに、彼らが生活する地域での環境上の変数が自ずと含まれていることになる。そのため、気づかないままに環境による変数をややもすると彼らの行動特性として把握してしまうことになる。本来備えている普遍的な特性を知るためにはこの環境的な要因を一旦整理して把握することが必要である。そのうえでこれらの要素を踏まえながら形成される彼らの行動特性を理解しなければならない。このような点において野生に生きる霊長類の研究が不可欠である。

現在、野生ザルの研究の必要性についての提言では霊長類についてこのような動向だけでなく、動物を用いた他の実験についても1つの反省と方向性を示してきている。たとえば、心理学では動物を用いた実験を行う。学習の実験では動物の使用は不可欠である。この際にはたして実験場面でどれだけ動物の自然状態を踏まえた研究が実行されているのかという問題がある。実験場面では実験の必要性もあってきわめて特殊な条件設定が行われる。それらの条件は当然多くの場合は自然界にはみられない。このような条件のもとで被験動物はいわば反応を強いられることになる。このようにして表出された反応がその動物が持つ本来の能力を十分に引き出したものであるかどうかは疑わしい。動物本来の能力や特性を基盤とした研究の実行のためにも野生、あるいは自然状態での動物に注目することの必要性が提言されている。

5. 人への過程としてのホミニゼーション

霊長類研究のうえで現在、最も注目を集めている研究に「ヒト化」の過程についての研究がある。これは「人間はいかにして人間になったか」という問いから始まる。

この意味には2つある。1つは人間の進化の過程に連なるものである。他の1つは現在われわれが実現しているいわゆる人間的な特徴をどのようにして備えてきたかという問題である。この延長線上では、「では人間としての本来あるべき姿はどのようなものか」という問題にもゆきあたる。この場合は、問題は単に霊長類研究の分野だけでなく、哲学や宗教、教育など様々な分野に及ぶことにもなる。

これら両者は一見すると問題は別々のものであるように見える。しかし、実際上は両者は密接に結びつく。人間が現在の特性を備えるためにはもちろん生物的な進化も必要である。しかし、それだけでは不可能である。同時に人としての文化の形成が必要である。この人としての文化のなかで人間としての資質を形成してきたといえる。また、逆説的であるが、このような

文化の形成自体が人間的な行為であるといえるが、この自ら形成してきた文化のなかで人としての資質を形づくってきたのである。

また、既に述べたように人間と霊長類、特にヒト上科に属するチンパンジー、ボノボラを中心として両者には、生活の上でも、行動の上でもほとんど相違がみられなかった。それは遺伝子のうえでも同様であった。この意味では人と霊長類は区別がつかないことになる。しかし、現実には両者は異なった生活をし、それぞれに異なった特性を備えている。このような状況はどのように説明されるのかという問題が生ずる。この問いについて、それらの相違をもたらす、一方ではチンパンジーやボノボ、ゴリラ、オランウータンなどの特徴を形成するとともに、片や人間としての特性を形づくるのは「文化」に由来すると考えられている。つまり相違が無いともいえるほどに近いものが、それぞれに異なった特徴を形づくる理由としてそれぞれが生活する文化の相違が指摘されるのである。人間とそれらの霊長類が共に誕生後の生活を通してそれぞれに特有な特性を獲得・形成していく文化的な生物であることは広く認識されている。

このようにみると人間的な「進化」は単に生物学的な変容だけではない。そこには文化を基盤として次第に現在の人間としての特性を備えてきたという過程が存在することになる。このことを、純粹に生物学的な進化と区別してホミニゼーション (hominisation) という。つまり、ホミニゼーションはこの意味でヒト化の過程をあらわす。

また、このホミニゼーションの概念であるが、これは進化の過程で人間自身が霊長目—真猿亜目—ヒト上科 (ホミノイデア) —ヒト科 (ホミニーデ) —ヒト亜科—ヒト属に分けられるように進化してきた過程に由来する用語である。このような位置づけを得る過程そのものがすなわち、人間としての特性を形成する過程でもあったわけである。従って、意味的にはホミニゼーションの過程についての論究は人間としての特性を獲得・形成する過程を焦点とするものである。

また「ホミニゼーション」とは「人の系統発生的過程」をさす言葉であり、「サルからヒトへの進化の過程を意味する」ものという考え (富田 1989) もある。また、「人の由来や起源・系統の解明」と、それだけでなく、その要因論や成因論まで含むと考える (江原 1972) ものもある。

霊長類を基盤として人間関係について論究する場合も、同じように1つの視点がここにある。つまり、人間関係論究の1つの方向としてはこのホミニゼーションの過程のもとに人間が「人間関係」を人間特有の特性として形成してきた過程を論究するものである。ホミニゼーションの概念のもとに人間がサルの段階からホミニーデとしての人としての成立過程をとらえるとともに、ヒトとしての特性を得ながら、人間にとって人間関係が人間に特有の特性として形成されてきた過程や人間関係の起源そのもの、またその本来の特性などについてアプローチするものである。

現在、人類化石についての発見が相次いでいる。1994年10月には最古の化石としてエチオピアでアウストラロピテクス・ラミダス (A. ラミダス) が発見された。化石人類の最初の重要

な発見は R.A. ダートによるものである。南アフリカで、1925年に後にアウストラロピテクス・アフリカヌスと名づけられた化石を発見した。最も古い化石としてはアファレンシスに関するものである。1974年にエチオピアでアウストラロピテクス・アファレンシスの化石が発見され、およそ370万年前のものと推定された。ルーシーと名づけられた化石である。先の A. ラミダスは約440万年前のものと推定されている。

これらの化石人類の発見を通して人類進化の過程がかなり解るようになってきた。それは発生の起源の時期などを知るだけでなく、化石から読みとれる特徴に基づいて生活の様子などについても解明されてきている。

6. 結果と展望

「人間関係論」において霊長類についての関心が高まっている。同時に、「霊長類研究」において人への研究が急速に進められている。両者を結ぶ接点にはいくつかのものがあるが、なかでも有力なものはホミニゼーションの概念である。

両者の研究のもとで、人間が長い歴史のなかで人としての特有な特性を形成してきた起源を探るところに1つの焦点がある。その意味では人間関係についていうならば、人間関係そのものの起源を求めるものである。そのベースとして霊長類研究が位置づけられる。

その場合、霊長類研究においては、当然それ自体の自然のままの状態についての研究が基本となる。その意味で野生の状態についての研究は重要な位置を占める。研究はここから出発すると言って過言でない。

霊長類研究からの人間関係論についての研究にはもう1つのねらいがある。それは、人間関係の本来のあり方を探るという点である。ここには人間関係としてのもともとのあり方を探るという意味とともに人間関係としての望ましいあり方を求めるという視点も含まれる。これらは現代社会で強く求められる視点でもある。このような課題に、人間関係の形成の起源やその過程にさかのぼって、人間が進化の過程において自己の特性や生活のスタイルとして人間関係を取り込んできた理由、関係自体の由来や、人間生活において人間関係が果たしてきた役割、機能などを追求することによって応えようとするものである。

注

- ・ A. ジョリー著、矢野喜夫、菅原和孝訳、1982、「ヒトの行動の起源」霊長類の行動進化学、ミネルヴァ書房
- ・ 浅見千鶴子、昭和62年、「比較発達学」サル・ヒトから人間へ、ブレーン出版
- ・ ドナルド・ジョハンソン、ジェイムズ・シュリーヴ著、堀内静子訳、1993、「ルーシーの子供たち」謎の初期人類、ホモ・ハビリスの発見、早川書房
- ・ ドナルド・C・ジョハンソン、マイトランド・A・エディ、渡辺毅、久木亮一、1986、「ルーシー」謎の女性と人類の進化、どうぶつ社
- ・ 江原昭善、1972、「Hominisation の持つ意味」、「霊長類研究所年報」2号、京都大学霊長類研究所

- ・ 江原昭善編, 1989, 「サルはどこまで人間か」, 小学館
- ・ 江原昭善, 平成2年, 「人類」ホモ・サピエンスへの道, 日本放送出版協会 p. 66
- ・ E. O. ウィルソン著, 伊藤嘉昭監修, 1984, 「社会生物学」, 思索社
- ・ 糸魚川直祐・日高敏隆編, 1989, 応用心理学講座「ヒューマン・エソロジー」, 福村出版
- ・ 河合雅雄, 1984, 「人類進化のかくれ里」ーゲラダヒヒの社会, 平凡社
- ・ 河合雅雄, 1992, 「人間の由来」上・下, 小学館
- ・ 北原隆, 乗越こう司, 1986, 「道具の起源ー類人猿から初期人類への道具行動の発達」⑬動物 : その適応戦略と社会, 東京大学出版会
- ・ 小原秀雄, 1983, 「人間の動物学」, 季節社
- ・ Robin I. M. Dumber, 1988, Primate Social System, Croom Helm
- ・ S. C. ストラム著, 榎本知郎訳, 1989, 「人とヒヒはどこまで同じか」, 動物社
- ・ Scientific American 編, 太田次郎監訳, 「子ザルの愛情」動物の行動をさぐる, 日本経済新聞社
- ・ スー・サベージ・ランボー著, 古市剛史監修, 加地永都子訳, 1993, 「カンジ」一言葉を持った天才ザル, 日本放送出版協会
- ・ 杉山幸丸, 1990, 「チンパンジーの叩き割り文化」, (河合雅雄編「人類以前の社会学」アフリカに霊長類を探る) 教育社 p. 449
- ・ 鈴木継美, 大塚柳太郎, 柏崎浩, 1990, 「人類生態学」, 東京大学出版会
- ・ T. Nishida, W. C. McGrew, M. Pickford, F. B. M. de Waal, 1992, Topics in Primatology, Volume 1, University of Tokyo Press
- ・ 富田守編著, 1989, 「人類学」, 垣内出版 p. 196
- ・ 上原貴夫, 1988, 「千曲川流域におけるサギ類の分布および遊動域」, 上田女子短期大学児童文化研究所「所報」第10号
- ・ 上原貴夫, 1993, 「上信越自動車道富岡工事事務所・佐久工事事務所管内における野生ニホンザルの生息に関する調査報告書」 碓氷峠自然観察所
- ・ 上原貴夫, 1994, 群馬県委託研究報告書「群馬県松井田町・妙義町・下仁田町周辺における野生ニホンザル行動調査報告書」 碓氷峠自然観察所
- ・ 山極寿一, 1994, 「家族の起源」, 東京大学出版会